〔「書の美術展」によせて〕

一字一仏の思想

―大和文華館所蔵「一字蓮台法華経」の特色について―

当館に所蔵される「一字蓮台法華経〈普賢菩薩勧発品〉」は、平家納経・久能寺経・慈光寺経に代表される、平安時代に制作された装飾経典の一つです。『法華経』二十八品の最後の章である「普賢菩薩勧発品」が書写され、見返しの部分には法会の様子を描いた大和絵が添えられます（図１・以下、文華館本と略称）。一般に見返しの部分には、普賢菩薩の影向図といった、経典の内容を直接に反映した絵画が添えられることが多く、文華館本には特殊な制作事情があったことを推測させます。見返絵の詳細については、『美のたより』172号の拙稿をご参照下さい。文華館本と一具として制作された他の章は、残念ながら伝わっておらず、まさに孤高の存在といえる作例です。

さて、文華館本の文字に着目すると、その名称が示すように、経文の一文字一文字が蓮台に載り、さらには金の輪が付されます。これは、一字一字を仏の身体に見立てているためです。釈迦の教えを文字で表したものが経典ですから、経典本来の姿、原理的な発想の元に生み出されたものといえるでしょう。こうした一字一仏の思想によって制作された経典は他にも作例が伝わります。展覧会では「一字蓮台法華経」（京都国立博物館所蔵）、本満寺と黒川古文化研究所に所蔵される「一字宝塔法華経」を特別出陳いたします。本稿ではこれらの比較を通じ、一字一仏の思想、文華館本の特色について考えてみたいと思います。

京都国立博物館に所蔵される「一字蓮台法華経」は、斐紙に引かれた銀泥の界線の間に、『法華経』「如来神力品第二十一」及び「嘱累品第二十二」が端正な楷書で筆写されたものです。両巻共に、認められた経文に蓮台が描かれますが、蓮弁に施された彩色が注目されます。如来神力品は、行の冒頭から群青・丹・緑青・銀泥の順に彩色が行われます（図２）。ただし、銀泥は一行おきに彩色されています。一方「嘱累品」は、先程のように右から左へと行毎に同じ彩色が繰り返されるのではなく、複雑な構成となっています。すなわち、丹を中心とした菱形文様が展開するのです。冒頭、経題部分の「妙」、二行目「時」、三行目「無」と一字ずつ左下方へ眼を追って頂くと確認出来ます（図３）。そして、丹の内側に緑青で彩色された菱形を配し、両者の文字の間を、群青・金泥・銀泥にて彩色を行います。料紙は装飾が控えられており、静謐な美を味わうことのできる経巻です。福島県会津美里町の古刹・龍興寺が所蔵する「一字蓮台法華経」九巻と、もとは一具であったとされます。

本満寺が所蔵する「一字宝塔法華経」は、紺紙に銀泥で宝塔を描き、その中に経文を金泥にて記した経巻です。九巻のうち、巻第二「譬喩品第三」及び巻第六「如来寿量品第十六」が出陳されます。宝塔は本来、釈迦の遺骨である舎利を奉安するためのものであり、宝塔の中心に文字を配するということは、経文そのものが仏身であることを示します。相輪・宝鎖・風鐸・塔身・台座部分の描写は一つ一つが細密になされており、銀泥で描かれた宝塔と濃紺の料紙との対比が見事な遺例です（図４）。

黒川古文化研究所に所蔵される「妙法蓮華経断簡」は、その伝来過程から「太秦切」「戸隠切」と呼ばれる断簡です。前者は、紺紙に銀泥で界線が引かれ、中心に経文が配された宝塔が文字と共に金泥で描かれます。塔身の形状は本満寺所蔵作例のような円形ではなく、アルファベットの「U」字を逆さまにしたような釣鐘形の形状です（図５）。太秦切とはもと広隆寺に伝来したとされることから付いた名称であり、諸家に分蔵されます。黒川古文化研究所所蔵の断簡は五行分が伝わり、『法華経』見宝塔品第十一の一部（『大正蔵』第九巻、三二頁c）であることが分かります。

後者は反古紙を漉き直した宿紙に、雲母摺りの宝塔が配され、塔身に経文が墨によって記されます。塔身の形状は太秦切と同じく釣鐘形であり、台座の形状が方形で今回取り上げた諸作例とは異なります（図６）。こちらは、長野・戸隠神社に伝わった経巻であり、五行分と、十行分の二紙が黒川古文化研究所に所蔵されます。それぞれ『法華経』序品第一の一部（『大正蔵』第九巻、五頁a）及び信解品第四の一部（『大正蔵』第九巻、九頁a）にあたります。

ここまで、特別出陳する経典を概観しました。このように経典の文字を仏身と見なす思想的な淵源として、しばしば紹介されるのが、唐・祥公撰述になる『法華伝記』の「我是方便品文字、法華文字一一是皆仏也」という文言です。これを受け、後白河法皇による『梁塵秘抄』には、「法花経八巻が軸々、光を放ち放ち、廿八品の一々の文字、金色の仏にまします」との記述があり、当時の宮中の人々にとって、『法華経』の文字は仏身に相当し、経文を飾り立てることは、美麗な仏画や仏像を造像することと同じ行為であると考えていたと思われます。しかし、現存する作例を鑑みると、あくまでも文字そのものを装飾することに主眼が置かれ、料紙自体は紺紙、あるいは斐紙・宿紙といった装飾を抑制したものが使われています。

以上のように見てみると、文華館本は二つの点で特殊であるといえます。一点目は、見返絵が添えられている点です。現存する一字一仏の思想のもとに制作された経巻のうち、見返絵があるのは文華館本のみです。二点目は、料紙装飾です。文華館本も料紙は斐紙ですが、そこには金銀の切箔や砂子が刷かれ、料紙そのものにもきらびやかな加飾がなされています。料紙への装飾を抑えた諸作例の中、ひときわ異彩を放ちます。文華館本は一字一仏の思想と、平家納経のような経典そのものを飾り立てることで功徳を積むことができるという、二つの思想を併せ持つ、唯一の作例といえるでしょう。

ところで、文華館本には後白河法皇宸筆との伝承があります。『栄華物語』「もとのしずく」の一節から伺えるように、装飾経典の制作は、宮中の女性たちや、有力な貴族が制作を主導したと考えられます。文華館本は、やはり後白河法皇周辺の人々が、過去の前例にとらわれない大胆な構想のもと、自らの思想を反映させて制作させた経巻ではないでしょうか。見返絵の中央で読経する僧侶を観る度に、そのようなことを感じずにはいられません。　（古川攝一）

※図2、3、4は特別展『古写経』図録、京都国立博物館、2004年より複写させて頂きました。

図１

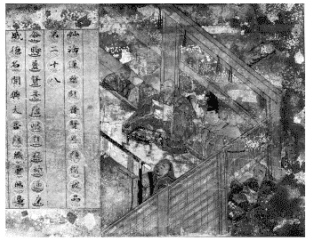

図２

図３

図４

図５

図６

季刊 美のたより No.177
平成24年1月6日
発行　大和文華館

Copyright ©2012 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.